

## 能(項羽)のツレ虞氏は必要不可欠か

宮本圭造

能(項羽)は、「虞や虞や、若を奈何せん」の詩で有名な四面楚歌のエピソードに取材し、項羽の壮絶な最期を描いた作品である。この物語の源流は、あらためて言うまでもなく司馬遷『史記』の「項羽本紀」にあるが、伊藤正義氏『謡曲集(中)』解題(昭和六十一年、新潮社)、同氏「項羽」(『謡曲雜記』、平成元年、和泉書院)が指摘するように、能(項羽)が生まれた中世日本において、項羽や虞美人の物語は、もっぱら軍記物語の挿入話や漢詩の注釈書などを通じて享受されていたようである。すなわち、『太平記』卷二十八に「付」として見える「漢楚合戦事」の記事や、晩唐の詩人、胡曾の漢詩の注釈書である『胡曾詠史詩抄』に見える「烏江」「垓下」の記事などがそれであるが、能(項羽)で語られる項羽の最期も、おむねこれらと同類の物語伝承を踏まえたものと考えられている。しかし、すでに諸先学が指摘するように、両者の間にはなお幾つかの注目すべき相違点が見られる。

美人の死をめぐる全く異なる記述が見られるわけだが、ここで何より重要なのは、『太平記』が虞美人の死を垓下の戦いでの出来事とし、その後、項羽はさらに敗走を続け、およそ三百キロ南に下った烏江の地で最期を遂げる、としているのに対し、能(項羽)では、虞美人もまた項羽と同じ場所(すなわち烏江の地)で亡くなったものとして描かれるという点であろう。虞氏の高樓からの投身自殺という設定は、『太平記』や漢詩注釈書の類には全く見えない。これについては、能(項羽)独自の脚色とするのが現在の通説だが、同じく項羽の最期を描いた麿曲(漢高祖)(別名「星」に、「馬をはやめて大將は、うがふの野辺の闇にあまり、寄せくる勢をぞ待ちかけた」と、烏江の樓閣の周囲に高祖の軍勢が押し寄せたという記述があるのを踏まえると、烏江の樓閣を舞台に項羽最期の戦いが行われた、とする別の伝承が存在した可能性も否定できないのではなからうか。ともあれ、能(項羽)では一貫して四面楚歌の垓下の戦いと烏江での項羽の最期を同一のものとして描き、烏江の樓閣における虞氏と項羽の死の場面を描いていることになる。

垓下から遠く離れた烏江の地に生えているという設定も、矛盾なく理解することが出来る。虞美人が亡くなった後、その魂が虞美人草の形となって生い出でたという伝承は、『古文真宝前集』卷五所収の、宋代の詩人曾鞏の「虞美人草」と題する詩や、『中華若木詩抄』所見の、五山僧惟肖得巖の同題の七言絶句などに見え、広く人口に膾炙するところであった。能(項羽)の前場も、その虞美人草を軸として劇が展開する。虞美人草をめぐるのは、虞美人の墳墓から生い出でたとする説と、項羽の墳墓から生い出でたとする説との両説あることが知られているが、能(項羽)はもちろん前者の説に拠ったものである。すなわち、ウキとシテとの問答に「虞氏と申せし人の、身を投げ空しくなり給ひしを、取り上げ土中に築き籠め候へば、その塚より生い出でたる草なればとて美人草とは申し候」と見える。先述のごとく、その虞氏の墓が、垓下ではなく、烏江の地にあったとすれば、当然、虞美人草も烏江の地に花を咲かせていたことになるわけである。

能(項羽)の後場では、その虞氏がツレとして舞台に登場する。後シテ項羽とともに、ツレの虞氏が橋掛りから現れる場面の詞章は、以下の通りである。

〔クリ〕シテ昔は月卿雲客うち囲み、今は樵歌野田の月、蘭台霧深し古松下の蔭、地苔紛々として旧銘を埋む

〔一セイ〕シテ紫の雲間横ぎる出立は地天つ少女の調かな

〔ノリ地〕地おのおの伎楽を奏しつ、おのおの伎楽を奏しつ、夢のつげぐしひく琴琵琶の、四面に鬨の声を上ぐれば、

また執心の責め来たるぞや、あら苦しの  
苦患やな

右の詞章のうち、「(クリ)」の一節は、宮殿における華やかな昔日とは打って変わって、今は苔の下に埋もれる身となった自身の境遇を述懐したものだ、その後いささか唐突に、「天つ少女」が紫雲の中から姿を現わし、伎楽を奏するという場面が展開する。この場面をめぐっては、佐成謙太郎氏『謡曲大観』(昭和五年、明治書院)が「お、虞氏が雲間の間から出て来た様は、天女が楽を奏するやうだ」と現代語訳し、その頭注に「虞氏の亡霊の現れたのを、天女が紫雲に乗ってくるのに見立てたのである」と指摘して以来、虞氏が「天つ少女」さながらに来臨する様を描いたものと解釈するのが通例である。すなわち、伊藤正義氏『謡曲集(中)』の頭注に「雲間に現れた虞氏の出現を聖衆来迎に擬した表現」、中司由起子氏『作品研究』項羽』(『観世』平成十一年八月号)に「項羽には虞氏の姿は天に見え(中略)二人の距離感を感じさせる」とある通りで、いずれも虞氏と天つ少女とを結びつけて解釈されている。事実、「(ノリ地)」の詞章中に「夢のつげぐしひく琴琵琶の」とあり、掛詞を織り交ぜながら、虞氏が琴琵琶を弾いていた、と読み得る文句が綴られるが、この文句をめぐってはまた別の解釈も成り立つ。

伊藤氏も注目されたように、右の「(一セイ)」「(ノリ地)」の描写は、確かに阿弥陀如来の聖衆来迎の場面を思わせる。例えば、『日本往生極楽記』『僧兼算』に「我が命まさに終りなむとす。空中に微妙の伎楽あり」とある如く、紫雲・伎楽といった言葉は、極楽往

生の場面で頻繁に使用される慣例表現であった。能においても、廃曲(陀羅尼落葉)に、「是時八万四千の天女、伎楽の声々、有難や」などといった表現を見ることが出来る。そして、その(陀羅尼落葉)では、ワキ僧の「いざや御跡申はんと、とくや御法の花のひも」という申いの読経によって落葉宮が聖衆来迎の奇瑞を目の当たりにするという場面で、右の文句が謡われる。そして能(項羽)もまた、天つ少女による伎楽は、「さまざまに申ふ法の声立て」というワキの申いと対の関係にあり、「(一セイ)」以下の文句は、ワキの読経による極楽往生の奇瑞を示すものと解すべきであろう。しかし、その奇瑞はあくまで幻想に過ぎなかつた、というのが、(項羽)の表現意図であつたと思われるのである。つまり、ワキの申いの力で、紫雲の中から伎楽を奏する天つ少女が現れ、阿弥陀如来が来迎するかに思われた。しかし、その天つ少女が奏する伎楽かと聞こえたのは、実は四面楚歌の窮地に追い込まれる中で虞氏が弾いていた琴琵琶の音であり、最期の時を迎えたあの日の思いが再び甦ってくるのだ、の意に解すべきなのではなからうか。虞美人が四面楚歌の場で琵琶を奏したとする伝承は今のところ見出せない。しかし、『史記』『項羽本紀』は、四面楚歌の窮地に追い込まれた項羽について「夜起ちて帳中に飲す」と記しており、その酒宴の記述から右のような場面が連想され、能(項羽)にも影響を及ぼした可能性は十分にある。

これに続く「(ノリ地)」の終結部「また執心の責め来たるぞや、あら苦しの苦患やな」の箇所をめぐっては、「死してなお項羽の為に舞袖を翻す美人草(虞氏)の執心」の苦し

を吐露したものかと思える説がある(伊藤氏『謡曲集(中)』)。しかし、これはいささか深読み過ぎよう。この部分、やはりシテ項羽の修羅の苦患と解さざるを得ないのである。

その後、「虞氏は思ひに堪へかね給ひて、高樓に登りて(中略)身を投げ空しくなり給へば」という詞章で、一畳台上上つたツレ虞氏が、台から下りて膝をつき、身投げの体を見せる。ここは唯一、ツレの見せ場となる場面だが、これ以外にツレの謡・所作はほぼ皆無であり、能(項羽)一曲の中で、虞氏が占める役割はきわめて小さいと言えよう。右の場面も、項羽の脳裏に甦る壮絶な最期の一シーンとして舞台上に可視化されたものに過ぎず、ここに登場する虞氏は、言ってみれば再現シーンを演ずる役者のごとき存在である。近年、そのツレの見せ場のあまりに少ないことから、「(一セイ)」の後にツレ虞氏による【破ノ舞】を入れ、あたかも虞氏が天つ少女として降臨する様を演じて見せることがあるが、これは現代の研究者の誤った読みを引きずられた曲解と言うべきであろう。ゲーテの『ファウスト』やR・ヴァーグナーの歌劇のように、女性の犠牲による男性の救済劇として(項羽)を読み替えることも不可能ではないが、そうすると当然、キリの文句は全面的な書き換えを要することになる。否、(項羽)のシテは、そのような虞美人の自己犠牲や生半可な読経では到底救済することの叶わぬほど、深い深い苦患の淵に沈んでいるのである。そこに焦点を当てるならば、能(項羽)からツレ虞氏の姿を完全に排除し、一種の修羅能として演出してみることも可能なのではなからうか。

(法政大学教授)